第２章　霧ヶ峰の自然と歴史のあらまし

霧ヶ峰は、広い草原に湿原と樹叢が点在する独自の自然景観で知られるが、自然のみならず旧石器時代からの遺跡など歴史遺産の価値も高い。本章では、霧ヶ峰の自然と歴史のあらましを述べる。

１　霧ヶ峰の位置及び自然の特徴

霧ヶ峰は、長野県の中部、八ヶ岳中信高原国定公園の中央に位置し、主峰車山（1,925m）周辺の概ね標高 1,500mから 1,900mに広がる高原である。

霧ヶ峰で最も大きな面積を占める草原は、周辺集落の人々が霧ヶ峰を採草地として利用することにより維持されてきた夏緑広葉樹林帯上部から亜高山帯に成立する半自然草原である。人との関わりで形作られたこの草原と天然記念物の３湿原、原生的な樹林としての樹叢の３つが組み合わさって独自の植生、生態系や自然景観を形成しているのが特徴である。

２　霧ヶ峰の自然

霧ヶ峰の自然を特徴付ける草原、湿原、樹叢についてその概要を述べる。

(1)　草原

霧ヶ峰の草原は、周辺集落の人々の採草により維持されてきた半自然草原である。

湿原の泥炭層に残された花粉の分析や遺跡から、霧ヶ峰の草原が広がったのは、平安時代以降と見られる。特に江戸時代には周辺集落の農耕用牛馬の飼料や田畑の肥料として草の需要が高まり、全山にわたる本格的な採草が行われるようになった。この入会地としての利用に伴い霧ヶ峰の草原が完成されたと考えられている。ただし、霧ヶ峰は高冷地で、やせた火山灰土壌であり、風が強く吹きつける場所等、一部は自然草原であったともいわれる。

近世以降、霧ヶ峰の草原は、周辺集落の人々の採草と草の生産能力を維持するための火入れ（野焼き）により維持され、数百年の間に独自の植生が形成されたが、農業の機械化や化学肥料の普及に伴って草の需要が減少し、昭和 30 年代の半ばを境に本格的採草が行われなくなった。その後約 50 年が経過した結果、草原に樹木が生えて森林化が進行しているほか、植生の変化が進んでいる状況がある。

霧ヶ峰の草原には、初夏から秋にかけニッコウキスゲ、ヤナギラン、ノアザミ、オミナエシ、マツムシソウ等に代表される数多くの花々が見られ、なだらかな山の稜線の起伏とともに広がる緑の草原景観とあいまって、重要な観光資源にもなっている。

なお、入会地であった歴史的背景から、八島ヶ原湿原周辺の一部が国有林であるのを除き、霧ヶ峰の土地は牧野農業協同組合及び財産区の所有となっている。

(2)　湿原

霧ヶ峰には八島ヶ原湿原、踊場湿原及び車山湿原の３湿原があり、いずれも一部の樹叢及び周辺の草原とともに国の天然記念物に指定されている。それぞれの湿原の概

要は、次のとおりである。

ア　八島ヶ原湿原

八島ヶ原湿原は標高 1,630mにあり、北西の鷲ヶ峰（1,798m）、北東の男女倉山（1,807m）、南の丸山（1,676m）に囲まれた高層湿原である。流入河川は雪不知沢ひとつであるが、湿原内に数箇所の湧水があるため、年間を通してある程度の水位が保たれている。水は、湿原内の各水路を通り、御射山から観音沢となって流出し、砥川を経て諏訪湖に注いでいる。

湿原の大きさは、東西約 800m、南北約１㎞ のほぼ二等辺三角形で、面積は約 43.2ha である。

この湿原は東と西の二つの泥炭の小山（ドーム）からできており、二つの池沼に発達した高層湿原が合一して現在のような大きな湿原になったと考えられている。

湿原の北西に八島ヶ池、北に鬼ヶ泉水、東に鎌ヶ池があり、東西のドームの間には、井戸と呼ばれる穴が数箇所ある。

泥炭は霧ヶ峰の湿原中最も発達しており、その厚さは、東側 7.9m、西側 8.1m である。

8.1mの泥炭層のうち表面から 5.5mまでは高層湿原性のもので、その下部は低層湿原性の堆積物である。泥炭の比重や、その他の研究の結果、上層は１年間に１㎜、下層は１年間に 0.5㎜ の堆積速度と考えられ、この湿原は約１万年の歴史を経過したものと推定されている。

平成９年(1997 年)の調査では、八島ヶ原湿原とそれに隣接している草原を含めて、シダ類以上の維管束植物 321 種類が確認されている（諏訪市教育委員会『霧ヶ峰湿原植物群落調査研究報告書』（平成 10 年３月）15～16 ページ）。これは、霧ヶ峰の３湿原のうちでは最多であるとともに分布上注目すべきものも最も多い。

イ　踊場湿原

踊場湿原は、池のくるみとも呼ばれ、標高 1,540mで、周囲をガボッチョ山（1,609m）、ゲーロッ原（1,684m）などに囲まれ、断層によって形成された東西約 820m、南北約 100mの盆地にできた湿原で、約 8.2ha の面積がある。

湿原の東部には踊場の池（アシクラの池）があり、これから流出する小川は桧沢川となって上川と合流する。この池から西へ行くにしたがって徐々に高層化が進み、高層湿原が形成されている。

踊場湿原も八島ヶ原湿原と同様に、池沼に生じた低層湿原に泥炭が堆積して形成されたと考えられている。泥炭層は約 2.5mと八島ヶ原湿原より著しく幼齢で、大部分の泥炭層は低層湿原性のものである。

踊場湿原では、低層湿原から高層湿原へ移行していく様子を見ることができる。

池から低層湿原、高層湿原へと発達したと考えられるため、八島ヶ原湿原とほぼ同じような植物相を示している。

平成９年(1997 年)の調査では、踊場湿原とそれに隣接している草原を含めて、シダ類以上の維管束植物 318 種類が確認されている（諏訪市教育委員会『霧ヶ峰湿原植物群落調査研究報告書』（平成 10 年３月）15～16 ページ）。

ウ　車山湿原

車山湿原は標高約1,780m、南に車山（1,925m）、北に蝶々深山（1,836m）があって、これに挟まれた谷間の渓流を中心として発達した湿原で、面積は約９haである。湿原内には多くの湧水があり、これが合流して西に流れて東俣沢となり、沢渡を通って観音沢に注いでいる。

小川の岸に発達した小湿原が、草原と交互に存在しており、泥炭の厚さは 0.5m内外のところが多く、最も厚いところでも 1.5m程度で、３湿原中最も幼齢のものであると考えられている。しかも、その表面が高層湿原状であることから、ほとんど低層湿原を経過しないで高層湿原に移行したものと推定されている。

車山湿原は他の２湿原より標高が高く、草原と入り組んでいることもあって、他の湿原とは植物相も異なっている。

平成９年（1997 年)の調査では、車山湿原とそれに隣接している草原も含めてシダ類以上の維管束植物が 265 種類確認されている（諏訪市教育委員会『霧ヶ峰湿原植物群落調査研究報告書』（平成 10 年３月）15～16 ページ)。

(3)　樹叢

霧ヶ峰には、車山の北側斜面と尾根を挟んで反対側の茅野市側斜面、強清水の駐車場付近、沢渡上部、物見石下等に、草原に浮かぶ島のように樹木が繁茂している原生的な樹林がある。これを「樹叢」（じゅそう）と呼んでおり、草原の一部に見られるミズナラ林などとは生育環境を異にしている。樹叢には、次のような共通した特徴がみられる。

①　車山火山の噴火時に流出した溶岩が、沢や凹地に長く筋状に堆積したまま露出し、大小様々な岩石となって積み重なっている。

②　草原の中の凹地や沢筋に沿って発達している。

③　樹木（低木層）が矮性である。

④　人手があまり加わらないでほぼ自然林に近い状態をしている。

⑤　亜高山帯の植物によって樹林は構成されている。

このような特性を持つ樹叢が現在まで残っているのは、樹叢内部に大小様々な岩石が露出していたり、洞穴や絶壁があったりして採草には不向きであったこと、また、沢筋や凹地であるため水の条件がよく、地形的に火入れから免れたことなどが挙げられる。このように人手があまり加わらず、自然林に近い状態を保っているので、小動物のすみかにもなっており、霧ヶ峰の本来の自然を知る貴重な手がかりとなっている。

参考文献：　ビーナスライン沿線の保護と利用のあり方研究会『ビーナスライン沿線の保護と利用のあり方研究会提言《最終報告書》』平成 16 年(2004 年) ３月

３　霧ヶ峰の歴史・文化遺産

霧ヶ峰と人の関わりは非常に古い。

霧ヶ峰の古代の遺跡の特徴は、黒曜石の一大産地である和田峠に近いことから、黒曜石の加工に関わる遺跡をはじめとして、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が多く存在することである。八島遺跡、雪不知遺跡、物見岩遺跡等、旧石器時代の黒曜石加工に関わる遺跡があり、霧ヶ峰南部のジャコッパラ遺跡群には諏訪地方最古級（約３万年前）の遺跡や縄文時代の落とし穴遺構がある。また、鷲ヶ峰西側の星ヶ塔遺跡からは縄文時代の黒曜石鉱山が発見されている。霧ヶ峰産黒曜石の矢じり、槍先形尖頭器（やりさきがたせんとうき）、ナイフ形石器等は、現在の関東地方、中部地方等で多数発見されているほか、縄文時代の遺跡としては遠く青森県の三内丸山遺跡でも見つかっている。

霧ヶ峰では弥生時代から奈良時代までの遺跡は発見されておらず、この間は空白期であるが、平安時代から中世の遺跡は多い。特に旧御射山遺跡は、鎌倉時代に幕府の庇護を受けて全国の武士が集まり盛大に行われた御射山祭を偲ばせる遺跡であり、祭祀に使われた薙鎌（なぎがま）や馬具類、鏃（やじり）等鉄製の道具及び素焼きの皿である「かわらけ」などが多数出土しているほか、旧御射山神社前の広場を囲むように、かつて祭の見物席であった桟敷の遺構がある。

このように古代から中世にかけての多くの文化財は遺跡として残るものであるが、近世以降の本格的採草により完成された霧ヶ峰の草原を含め、霧ヶ峰の空間全体が人との関わりで形成された文化的遺産の側面を持つ。

加えて、島木赤彦の短歌、随筆をはじめとする近代文学の題材となり、また、深田久弥、藤原咲平、柳田国男等様々な分野の文化人が訪れて霧ヶ峰で「山の会」が催されるなど霧ヶ峰の文化は深みを増した。さらに、昭和初期にいち早く池のくるみ（踊場湿原）にスキー場が開発され、霧ヶ峰グライダー研究会が設立されるなど、スポーツとの関わりも深い。

参考文献：　ビーナスライン沿線の保護と利用のあり方研究会『ビーナスライン沿線の保護と利用のあり方研究会提言《最終報告書》』平成 16 年(2004 年) 3 月

諏訪市教育委員会資料